

横山禎徳著「循環思考」東洋経済新報社 2012 年 4 月 12 日刊を読む

「良循環」をいかにしてつくりだすのか—100回以上考える—

1. (1) 現在、世の中に存在しない「良循環」をつくりだすためには創造性の発揮が不可欠である。
(2) しかし、かつてエジソンがいったように、「創造とは 1%のインスピレーション(ひらめき)と 99%のパースピレーション(汗をかくこと)」であることは確かだ。
(3) 要するに、どうやって「汗をかく」といいののかという問題である。
(4) それはどれだけあれやこれやと飽きもせず繰り返し考えることができるかということに尽きる。
(5) 繰り返し考えると本当に「良循環」は見つかるのかという疑問に対して、答えは、イエス、必ず見つかると筆者は答える。
(6) なぜなら、見つかるまで繰り返し考えるからだ。
(7) 「成功する秘訣は何か」という問いに対して答えは「成功するまでやる」というのと同じことである。
2. (1) それでは身もふたもないと思うかもしれない。
(2) しかし、だまされたと思ってやってみることだ。
(3) 人の 10 倍は繰り返し考えるという習慣、そしてそれに飽きないという心のもち方を身につけるべきだ。
(4) 普通の人はいざいざ 10 回ぐらいしか繰り返して考えないから、10 倍ということは大体 100 回ぐらい繰り返し考えるということになる。
(5) 当然、何日もかかる。そうすると、頭の中がそのことでいっぱいになり、感覚が鋭敏になってくる。
(6) そうすると、ちょっと目にしたこと、ちょっと聞いたことがきっかけとなって突然、「ああそうか、ここから考えればいいのだ」と突然わかってくる。
(7) これは自分で直接体験してみる以外に手はなく、いくら説明してみても始まらない。繰り返すが「身体知」なのだ。
3. (1) あるドイツの哲学者が「人間はやりたいことをやれるという自由をもっているが、何をやりたいかを決める自由をもっていない」という趣旨のことをいったが、最近の脳科学も人間の自由意思に疑問を呈している。
(2) われわれは脳を制御していないのだ。
(3) すなわち、われわれ(「心」と呼ぼうと「精神」と呼ぼうと)は脳に「創造的な発想をしろ」と命令することはできないのだ。
(4) 脳はわれわれのことを聞かない。
(5) 脳細胞、すなわち、ニューロンが勝手気ままに「発火」している中で瞬間的にその「発火」が同期すると「ハハハ、そうか」ということになるのであり、確率の世界である。

(6)したがって、その瞬間をつかまえる確率を高めるためには、ニューロンの同期をコントロールできないわれわれは考える回数を増やすしかないのだ。

(7)それが、100回以上考えるという意味である。

4. (1)このような思考は訓練が必要だ。

(2)特に、規範文化、すなわち、法律とか宗教とかのように大昔から遠い未来に向かって是は是であり、非は非であり、それが変わることはないという文化に慣れ親しんで育ってきた人、あるいは、世界の「先進事例」を参考、あるいは模倣することで過ごしてきた人はこの訓練を通じて脳のニューロンの「発火」が同期し、シナプスがつながる瞬間の実体験をしないと「良循環」を創造するということがつかみにくいかもしれない。

5. (1)しかし、そういわれても、100回考えて思いつくものでもないだろう。

(2)それ以前に、何を繰り返し考えたらいいのかわからない、皆目検討もなつかいという向きもある。

(3)何を取っ掛かりにすればいいのか。

(4)それはこれまで見たように着目すべき現象に対して仮説を立て、検証することである。

(5)この場合、検証するとは仮説としての「累進効果」を考え抜き、それをデータの分析を通じて確認することである。

6. (1)20世紀初頭のアメリカの哲学者、チャールズ・サンダース・パースがこの仮説・検証型推論のことをアブダクションと呼び、インダクション(帰納法)、ディダクション(演繹法)に加えて第3の推論方法と呼んでいる。

(2)異論も多いようだが、筆者の実体験では、デザインはまさにこのアブダクションであり、過去の経験や自分の美意識、好み、こういうものを実現したいなどの思いに基づいたデザイン仮説を立てて、その仮説を機能性、構造的合理性、社会性、審美性、経済性、そして依頼人の満足度等の角度から検証することを時間の許すかぎり繰り返すのである。

(3)認知文化と呼ぶべき科学の分野もアブダクション、すなわちつねに新しい仮説を立てその検証を繰り返しているのである。

(4)米盛裕二の「アブダクション—仮説と発見の論理」(勁草書房)によると、かのアイザック・ニュートンもそのような思考プロセスを通じて感覚を鋭敏にしているときに、林檎が垂直に落ちるのを見て万有引力の法則を思いついたのだそうだ。

(5)ニュートンの実家は農家で、時々家に帰っては息子の業績をまったく認めない無学な農婦であつたお母さんに農作業を手伝わされていたそうだから、そのときにいろいろ仮説を考えていたのかもしれない。

(6)いずれにしても、「ジョージ・ワシントンと桜の木」のような後につくられた伝説ではないようだ。

7. (1)このような繰り返し考えることはやったこともないし、得意でないだろうし、これから自分を訓練するのも大変だし、いまさら「隠れた才能」を発見する気もしないという人には簡便法がある。

(2)それは、世の中に存在する「良循環」を拾いだし、それをパターンとして覚えこんでおく。

- (3)人間が今のところコンピュータに勝っているのはパターン認識だからそれを活用するのだ。
- (4)そして、それを適宜引きだしてきてテーマに即して変形し、新しい形に改良するというやり方だ。
- (5)記憶力は往々にして創造力を置き換える。creative(クリエーティブ)であることは難しいが、「臨機の才」とか「工夫に富んだ」という意味の resourceful(リソースフル)な能力を発揮することはそれほど難しくない。
- (6)頭の中に覚えられるかぎりの事例を整理してしまっておき、タイミングよく引きだせばいいのだ。
- (7)われわれはリソースフルな答えをクリエーティブな答えと勘違いしていることも多いのである。
- (8)例えば、別の分野ではよく知られたアイデアをある分野に持ち込み、活用するのはリソースフルなのだが、その分野しか知らない人にとってはクリエーティブに見えるのである。
- (9)シュンペーターの「新結合」も同様な側面がある。

8. (1)分析力も基本は記憶力だ。500 くらいの分析事例を集め、自分なりに整理して頭の中に入れておけばいい。
- (2)そして、問題のタイプに応じて即座に適切な分析方法を頭の中から引きだせばいい。
 - (3)要するに、コンピュータのようにストアし、リトリブするという作業と同じだ。
 - (4)しかし、分析力があるからといって問題解決力があるとはかぎらない。記憶力だけでは問題解決はできない。
 - (5)問題解決とはばらばらの要素を全体としてつじつまが合うように統合することであり、解決への強い意志がまず必要だ。
 - (6)学校の秀才が実社会でたいしたことがないといわれるのは、学校では分析力が評価されるが、実社会では問題解決能力が評価されることも関係があるのだろう。
 - (7)学校の秀才も問題解決能力と問題解決への意志が弱いと「優秀なのに無能」ということになるわけだ。
 - (8)しかし、残念ながら、今の大学教育は専門性を深く追究する訓練をしてくれるが、統合的能力としての問題解決能力を訓練してくれる場ではない。
 - (9)お役所が学校の秀才の採用に偏りがちなのは問題だという指摘がよくあるが、かといって、この「問題を裏返して」みても答えにはならない。
 - (10)まずはとにかくにもこの問題に関する「悪循環」を描いてみることだ。

P156 ~ P160

[コメント]

100 回以上考え良循環をつくり出す。「仮説」として累進効果を考え抜き「検証」する。または、世の中に存在する「良循環」をベストプラクティスとして選び出し、パターンとして記憶する。マッキンゼー日本支社長として、また、東京大学 EMP の推進者として御活躍の、私の尊敬する横山先生の社会システムデザイン論は何回読んでも参考になる。是非、御一読を。

— 2014 年 10 月 16 日 林 明夫記 —